

**SSKR I.L.EXPRESS**

全国自立生活センター協議会 (JIL)  
Japan Council on independent Living Centers  
〒192-0046 東京都八王子市明神町 4-11-11-1F  
TEL 042-660-7747 FAX 042-660-7746  
E-mail:office@j-il.jp URL http://www.j-il.jp/

*jil*

# 東北関東大震災 障害者救援本部特集号

## 自立情報発信基地

No.6

### — 宮城からの報告 —

CIL たすけっと・被災地障がい者センターみやぎ 及川智

東日本大震災から1年8か月が経過しました。もうすぐ2度目の冬がやってきます。今も変わらず、全国いや世界からご支援をいただき心から感謝申し上げます。ありがとうございます。

被災地障がい者センターみやぎは、現在2つの拠点活動(石巻、登米【南三陸】)を中心にして、月1回の運営会議での報告、協議を行いながら活動を続けています。その活動ごとにまとめてみたいと思います。

#### 【提言・要望活動】

10月26日付で仙台市に対し、要望書・質問書を提出しました。被災経験や支援活動を通じて感じ、考えたことを11項目にまとめました。安否確認のあり方、個人情報取り扱い・提供方法、仮設住宅、復興住宅、避難所・福祉避難所のあり方などを実情に即した仕組み、対応とする事を求めています。今後は、市からの文書回答を得たうえで、市当局と協議を持つ予定です。

#### 【センターみやぎ手記集の作成】

センターみやぎの活動を振り返り記録すると共に今後の災害時の障がい者支援に役立てるために、関わって頂いてできるだけ多くの方に手記を寄せて頂いています。また、昨年の活動の大きな財産であるアンケートも合わせてまとめていきます。

#### 【センター南三陸のNPO法人化】

昨年7月に東北地域の支援拠点としてスタートしたセンター南三陸は、来年度の児童デイサービスなどの事業開始に向け、NPO法人 奏海の杜(かなみのもり)となります。11月18日に設立総会を開催しました。これまで多くの支援のもと、3人(現在4人)の地元スタッフを中心に地道な支援活動を着実に進めてきました。児童のニーズ、地域のニーズに寄り添った社会資源となるべく、活動を続けます。

(タッチドローイングに挑戦)

(ハロウィンを楽しむ)



### 【センター石巻情報誌「によっきり」の製作】

大きな反響を得て創刊した「によっきり」は次回で第4号。活動を知らせると共に、まちと繋がる重要なツールとなっています。

### 【共に生きる石巻を作りだす連続講座】

今年度センターみやぎの主催で、連続講座を実施しています。「障がい者が犠牲にならないまち」を目指して、障がいのある人もない人も共に地域の中で暮らしていける石巻を目指して、共に学ぶ教育を実践されてこられた講師の方をお招きし、講演をいただいております。子どものうちから、一緒に育つことが共生社会を作る一助になると信じています。12月に第3回講座、2013年3月に第4回講座をやる予定です。

(多くの方が参加されました)



(石巻の様子 小林さんのお手紙より)



### 【交通バリアフリーの取り組み】

センター石巻の最寄り駅である蛇田駅は、バリアフリーではなくスタッフが通うのにもとても不便です。この駅のバリアフリー化が大きな活動目標となっています。今後、調査や要望書の提出など運動を起こしていきます。12月8日には、蛇田駅の課題など交通バリアフリーをテーマにしたシンポジウムを仙台で開催します。

このシンポジウムをきっかけに、まずは蛇田駅、そして復興の大きなポイントである交通バリアフリーについての取り組みを拡大していきたいと思っています。

以上のような、活動を通じて復興を目指していきます。



(まだ完全に路線がつながっていない仙石線で)



(仙石線 蛇田駅)

# 被災地からの報告

## その9 震災時、腎臓病患者がどのような状況におかれたのか

上遠野 良之 (福島県腎臓病患者連絡協議会)

### 透析治療には電気と水が不可欠

皆さんは透析ということを聞いたことがありますか。透析治療というのは週2回から3回で、1回に4時間から5時間かかります。これは大雪が降ろうが台風がこようが今回のような大震災がこようが、一日おきに行なわれなければなりません。疾病としては特に難疾病です。全国で約30万人の方が透析治療を受けています。現在、福島県内では約70の透析施設で4500名が透析治療を受けています。また県外の施設で500名ぐらいの方が避難透析を受けています。

透析治療には電気と大量の水が必要です。透析治療にはなぜこんなに水が必要か申しますと、患者さん一人に毎分5000CCの水を使います。1時間には30リットル、5時間透析ですと150リットルの水を使うこととなります。それが一日に30人40人となりますと、いかに大量の水が必要となるかご理解ができると思います。

総合病院や外科手術をするクリニックには、自家発電装置が設置されております。福島・郡山地区では震災翌日から電気が復旧しましたので、問題は水道の断水でありました。福島市・いわき市・須賀川市・郡山市などは水道局がタンク車で給水活動に入りました。それでも足りなくて消防自動車サイレンを流しながらの給水活動であったために、近所の住人からは火事でも起きたのかとサイレンの度に皆さんびっくりされていました。

### 被災後の福島県内の透析治療の状況

福島県内の透析治療についての地域ごとの被災状況を報告します。福島県は相双地区、いわき地区、福島・郡山地区、会津地区、県南地区に分かれております。特に太平洋沿岸部は津波の被害の大きかった地区です。また原子力発電所の事故の被害で特に大変な被災状況であります。

### 相双地区

相双地区は地震と津波そして原子力発電所放射能事故という状況であります。富岡・浪江町には2つの透析施設がありまして、200人ぐらいの患者さんがいます。ここは20キロ圏内の避難勧告地域指定がされたので、避難先の福島・郡山・二本松等の透析施設で避難透析を実施しております。南相馬市には2つの病院で100名ぐらいの患者さんがおりました。20キロから30キロ圏内による避難ということ



で、今年の8月下旬より透析再開しております。しかし、いままも深刻なスタッフ不足に悩まされています。

### いわき地区

この地区は、地震と津波、原発問題そして水道が断水するライフラインの大幅な遅れがでています。新潟方面に400人、首都圏に1000人規模の集団移動ということで、新聞紙上でも大きく報道されました。また、体調の問題で避難が無理の患者さんはいわき共立病院の治療室を使って、開業医の先生方は交代で治療に当たっています。なお4月に水道が復旧したことで、通常の透析が実施できるようになりました。

いわき市腎臓病患者友の会が避難された1000人の方から被災状況をアンケート調査し、約50パーセントの方から回答をいただきました。避難先で透析施設を移動された回数は、2回目までの方が70パーセントもいます。中には5回も代えた方がいま

す。通常の透析施設に戻られたのはいつかという質問には、3月中が17パーセント4月が45パーセント5月が12パーセントで、大体2～3ヶ月で戻っている患者さんが80パーセントでした。避難先で困ったことは、人間関係が多かったようです。知らない土地で不安だった、家族との連絡が取れない、体育館はとても寒くて大変だった。それから避難先の透析施設から2～3日中に自分で他の施設を探すように言われて困ったという意見がありました。避難先でうれしかったことは受け入れ先の病院がとても親切であったとか、福島から来たという親切に受け入れてくれたとか、また患者同士連帯の輪が生まれたという意見がありました。

### 福島・郡山地区

ここは建物損傷が大きかった地区です。一時期他の透析施設で透析を受けておりました。相双地区からの避難した患者さんを受け入れた病院は、透析を3クール体制で大変がんばって治療をしているそうです。

### 会津地区

会津地区は地震とか原発の被害はさほどなかったので、問題はないと思いがちですが、個人的に浜通りから移動された患者さんが大変多くなりました。加えて、大震災により物流が悪く、機材不足が懸念されて週2回の透析で対応されました。会員からは週2回は苦しいと悲痛の電話がありました。そこで県透析災害対策責任者を通じて要請し、やっと4月より週3回になりました。

### 県南地区

白河では、建物の損傷もなく、通常の透析が実施されました。須賀川市内のある透析施設では、建物損傷がひどく他施設に依頼しています。また貯水槽を持たないクリニックでは給水できず、大震災を契機に自家発電装置と貯水槽設置をつけたそうです。

### 今後の防災計画は

福島県腎協としては、県と県議会各党宛に要望書を提出しました。透析治療は水と電気が不可欠です。緊急時に供給体制ができるよう整備してください。もし透析治療ができない時は、患者さんの移送と代替施設を確保してください。また福祉避難所でも食事管理ができるように配慮して欲しいことや、災害時、

透析患者の通院の問題も災害対策の一環として捉えて欲しいなどを要望しました。

震災時にはガソリン不足で通院できず、非常に苦労しました。県の対策本部のほうに連絡をしましたが、全く受け付けてもらえませんでした。

震災前、福島県内では福島市・郡山市・会津若松市・いわき市といった人口10万から40万人規模の都市でも、福祉避難所の指定を受けていた所はゼロでした。こうした中で、本年2福島市が41箇所の福祉避難所の施設指定をしたことは、明るいニュースです。しかし、大規模災害が発生した場合、指定を受けていた施設が、実際開設し運用していただくことが今後の大きな課題です。

個人としては、災害手帳・健康保険証・常時服薬している薬をかばんの中に入れて、持ち歩けるようにしておくことが大切です。災害手帳は全腎協で作ったものです。阪神淡路大震災の教訓を生かして、透析の記録などの情報が挙げられています。これは腎臓病に関わらず有効と思われる。

後、通信網、連絡体制の整備です。大震災では、固定電話、携帯電話など全く使えませんでした。こうした中で公衆電話が大変活躍しました。ところが最近は携帯電話の普及で、大幅に減っております。災害時には公衆電話がもっとも必要ではないのかと思いました。

最後に、放射能汚染の下でどう生きていくのかという大きな課題を抱えています。福島原子力発電所の放射能もれの収束と一日も早い復興をお祈りいたします。

(2012/6/30 福島フォーラム いわきにて)



(南相馬仮設商店街)

## その10 東日本大震災

小林 和樹 ( 障碍児と共に歩む会 石巻 )

3. 11地震が来る事を知らず、僕は母達が活動する「つながりの家」の視察で長町(仙台市)の「びすた〜り」に来ていた。朝9時にイオン石巻に集合して出発した。母と三国さん八木さんたち5人で行った。いろいろ説明を聞いて予定した時間より遅くなり、自分が働いている「小さな栗」にも寄ると計画していたが寄れなくなった為、残念な気持ちだった。

視察研修が終り、石巻に戻りイオンで解散した。ついでに買い物をして帰ろうと言う事になり、僕は本屋に母は別の買い物をしていた。その時「カタカタカタカタ・ゴォー」東日本大震災発生。サイレンが鳴り、やばいと思いテーブルの下にかくれた。地震は3回に渡って立て続けに来た。半分以上の本が落ち、天井のガラスが割れ、棚は一つだけ倒れたが他の棚は倒れなかった。ゲームセンターの電気も全て落ちた。係員さんの誘導で外に避難し揺れがおさまるのを待った。揺れがおさまり、母が心配で車がある方に歩いて行くと「和樹ー」と母の声。とにかく車に乗り家に向かった。途中アナウンスで「大津波警報が発令された。避難してください。」と流れた。自分は早く高台に行きたいと思ったが、母は一度家に行くと言ったので付き合った。

家に着くとまもなく津波が襲った。物凄い速さで津波が来た為、父は慌てた様子でいつもとは違う叫び声で「2階に早く上がれ。早く早く。」と言い、ズボンのすそまで濡れながら2階にあがった。愛犬のアニーを連れて2階に避難できなかった。

一日目。その日は雪が降り凄く寒かった。一晩中地震で揺れていた。食べ物も水も無い暮らしをしていた。この日は2階の窓から近所の人たちと互いに呼び掛けあい助け合った。助け合いや気使いも大事だなと思った。僕は心配しながら「いつ救助くるのかな? あー兄貴に会いたい」と何気なく感じていた。

2日目。朝からヘリが巡回し、僕と母と姪と祖母は必死で救助を求めている。目立つ色のタオルや

「おーい」と叫ぶ声で助けを求めた。父は水没した1階の降り、流れてきたコーラやかりんとう等を拾って来てくれて5人で食べていた。お腹が空いていたので美味しかった。2日目になっても中々水が引く心配が無く、家の中で救助を待ち続けた。仕事を一ヶ月休んでしまったので、早く復帰したいし、仙台のアパートにも帰りたい気持ちだった。もう一つ、「ケイちゃん大丈夫かな?」姪が「明日ママに会えるかな?早く会いたいよ。」と泣いていた。早くママに会わせたいと思った。

3日目。水も無くなり、最後には母が使っていた湯たんぽの水を飲み続けていた。その時、「オーイ大丈夫ですか?」兄が呼んでくれたのか、救助隊が助けに来てくれた。「あー良かった。



これで皆、無事に助かる。」ボートに一人ずつ乗せて貰い、やっとの思いで助かった。外は海化し、家の1階半分が埋まる程の津波を目の辺りにした。言葉にならないほどのショックで大事にしていたアニーもパソコンも流され、無残な姿になった。無事に救助され、青葉中学校に行った。母の友人や家の親せきのところでお世話になった。ずーっと電気一つないローソクと懐中電灯の暮らしだった。

しばらく自分が住んでいるアパートに帰れずにいた。少しして、ドロだらけの家の片付けに毎日行った。タンスや水没した物すべてを片づけた。貴重な物があると取っておいたりもした。海水まじりのドロだったので、物凄く臭かった日もあった。段々、片付くにつれ、津波の凄さを思い知った。

片づけが終りに近づいた所、一通の電話があった。大学時代の恩師だった。近くに来ていたので来てくれた。嬉しかった。家の中も見てくれた。それから、もう一通の電話が。大家さんだった。「迎えに行きますか。」とあったので、迎えをお願いすることになった。「やっと仙台のアパートに帰れる。あー良かった。」超うれしくなった。

大家さんの一番下の子供が「和樹君、帰ってきてうれしい。」と言ってくれて、こっちも凄くよかった。仕事にも戻れて良かった。1ヵ月も休んでしまったので、忙しさが戻り、3年目の今も一生懸命がんばっています。

(機関紙に寄せて、原稿を書いていただきました)

—小林厚子さん(和樹さんの母親)が友人・知人に送ったお手紙より—



小林 厚子 (障碍児と共に歩む会)

1000年に一度と言われている未曾有の東日本大震災から1年と8ヶ月が過ぎました。私たちの活動拠点だった石巻市住吉町の「つながりの家」も大きな被害を受け、パソコン・コピー機・アルバムに至る10年の活動の足跡の全てを失うという悲しい状況になりました。それまで使用していた建物も全壊し、今年6月には解体され現在では更地のままとなっています。私たちボランティアスタッフのほとんどの自宅も被災し、一時は会の解散も考えましたが、全国からたくさんの方の励ましやご支援を頂き、あらためて多くの方とつながっていることを実感しました。拠点となる場所もなく大きな不安を抱えながらではありますが、再びできる事からやっという確認し合いました。それは何よりどんなに重い障碍があっても地域で暮らすことにこだわり、障碍児・者とその家族の環境改善を主目的にかかげ、これまで活動してきた私たちの思いと、それに賛同し共に頑張ってきた地域に住む障碍児・者の母親たちからの強い願いでもあります。

加えて学区外の仮設住宅で暮らす子ども達は大きく教育環境も変わり、仮設校舎や間借り校舎・予想もしなかった統合や廃校の話まで言われるようになりました。この時期になると、来年の学校どうするか、今までの送迎か近くに転校かと悩み始めた人たちもいます。何とかみんなで情報交換しながら安心して地域で子育てをして行けるような環境にと願っています。小さな会のささやかな活動ですが、震災を体験した今だからこそ、障碍児・者が地域にこだわってきた声を大きいものにしたいと思っています。

# 自主上映会募集のご案内

2012/12

東北関東大震災障害者救援本部

2011年3月11日 マグニチュード9.0という未曾有の大震災が東北・関東を襲いました。

地震に続く 津波 原発事故

この時、被災地は 被災地の障害者は

あの時 福島で 宮城で 岩手の地で 何が起こっていたのでしょうか。

この映画では 被災した障害者とそこに関わる人々の証言をまとめました。

救援本部では支援活動を通じ この証言を忘れてはならないという思いが強まり、映画製作に取り組みました。このドキュメンタリー映画は記録する・伝える・備えるのねらいを持っております

あなたの仲間や団体や学校で ぜひ上映会を企画してください。そして、あなたの町や地域が障害のある人もない人も安心して共に暮らせる町への一歩となることを願っています。

【タイトル】 「逃げ遅れる人々～東日本大震災と障害者～」

【映像素材】 DVD VIDEO \*2012年/日本語/74分/16:9/ドキュメンタリー  
\*日本語字幕・選択可(聴覚障害者用)

## 【上映会実施の要項】

上映可能時期	2013年2月以降 (それまでにご準備ください)
団体・ライブラリー用	10,000円で販売
講師派遣	被災地の障害当事者・救援本部関係者・映画製作関係者 謝金 1時間 10,000円(交通費・宿泊代は別途)
提供できるもの	チラシ(A4)有料 カラー両面刷り 裏面に余白 会場・日時など印刷可 データ希望の場合は無料 (ポスターは用意しておりません)
販売グッズ	一般用 DVD 3,000円(2013年2月発売)
配布物	救援本部機関紙
展示	救援活動の報告写真パネル貸し出し(無料・送料のみご負担ください)

\*映画紹介は救援本部または映画のホームページをご覧ください

\*上映会に関するお問い合わせは救援本部に寄せてください

お問い合わせ 東北関東大震災障害者救援本部

〒192-0046 東京都八王子市明神町4-11-11-1F

TEL:042-631-6620 / FAX:042-660-7746

e-Mail:9enhonbu@gmail.com

## 自主上映会申し込み (FAX 042-660-7746 に送ってください)

お名前・団体名

ご住所

上映日時 年 月 日 ( ) \*救援本部のホームページに掲載します

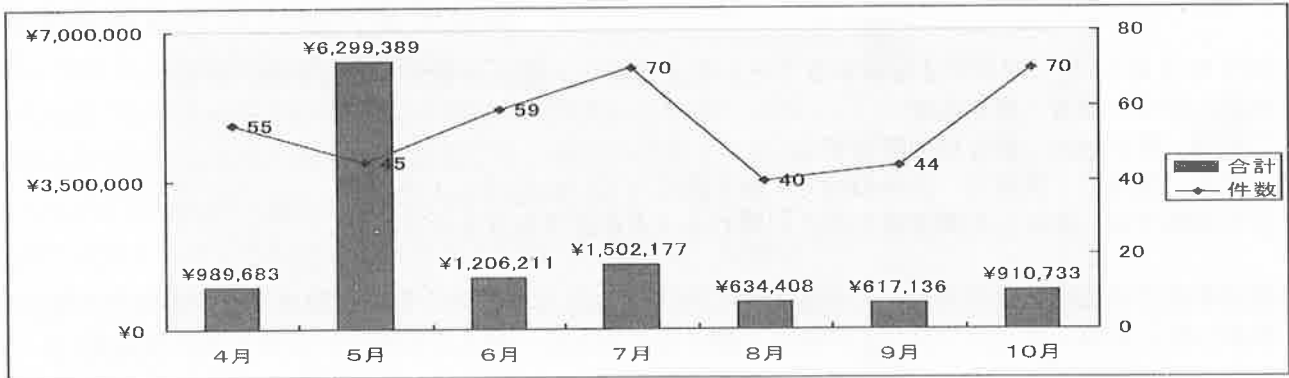
開演時間 時 ~ 時 会場名

電話番号 メールアドレス

メッセージ

# 〇〇〇皆様からいただいた支援金〇〇〇

— 2012年4月から10月まで —  
3月までの状況は、前号で決算報告をしております。



- 6つの被災地障がい者支援センターの運営 (宮古・大船渡・仙台・南三陸・石巻・郡山)
- 3つの事業所に移送サービスの委託 (気仙沼・田野畑村・山元町)
- 17人の専従・非常勤のスタッフたち (各センターとDPIと救援本部に)
- 22台の車両 (各支援センターにリフト車・スロープ車・乗用車など)

これらの 人と場所と車 を使って、さまざまな救援活動 が続けられております。

移送・送迎サービス 日中活動支援 聞き取りの訪問 調査活動 相談支援  
 保養・避難・移住支援 復興会議への参加 行政への要請 イベント企画 学習会  
 研修 町づくり 交流活動 訪問者対応 被災地センターから法人化へ

この秋、各地のイベントで支援金の呼びかけがおこなわれました。救援本部に届いた報告です。



(東京 八王子市)  
ワークセンタークリエイト

(静岡 富士市)  
チャレンジドふじ

(愛媛 松山市)  
被災地応援隊 はなみずき

(東京 目黒区)  
チャリティークリスマスカード原画展

東日本大震災が過去のこととして風化されないように、情報を発信し続けることだと思います。救援本部では皆さまのご厚意に支えられ、被災地の障害者団体と連携しながら、現地での様々な支援に取り組んでいます。救援活動が本来の社会資源に移行できることを目指し、地域の方々とつながるように、これからもずっと、被災障害者支援を、必要な限り継続していきます。

## 〇〇〇引き続き 皆様さまのご支援をどうぞよろしくお願い致します〇〇〇

### 東北関東大震災障害者救援本部

<東京事務局> 全国自立生活センター協議会 (JIL) 内  
 〒192-0046 東京都八王子市明神町 4-11-11 シルクヒルズ大塚 1F  
 TEL: 042-631-6620 FAX: 042-660-7746 E-mail: 9enhonbu@gmail.com  
 ホームページ <http://shinsai-syougaisya.blogspot.com/>



《救援活動の状況については、上記のウェブサイトにて、随時ご報告させていただいております》

このお便りにはご支援をいただいた皆様に活動報告としてお届けしております。

払い込み用紙は、強制するものではありません。支援金をご協力いただける方はご利用ください。

発行所 東京都世田谷区砧 6-26-21 障害者団体尾定期刊行物協会 定価 100円